

第1回 幼児教育振興プログラムに係る検討委員会の概要

平成24年7月5日
小 中 学 校 課

【第1回検討委員会の開催】

- 1 日 時 平成24年7月5日（木） 午後2時～4時30分
- 2 場 所 県立倉吉未来中心 セミナールーム7
- 3 参加者 委員6名（欠席：大橋委員、森本委員、福井委員）
事務局：生田教育次長、牧野義務教育主査、吉野課長補佐
他県教育委員会事務局関係者、福祉保健部関係者
- 4 協 議 幼児教育の課題と基本的な方向性について

5 委員からの主な意見

（1）現状と課題について

- ・ 少子化や家族、社会の変化などにより人と触れ合う機会が減少している。幼児教育に対する関心の二極化もある。家庭や地域の課題もあるだろう。
- ・ 若い父母の子育て、長時間保育などにより家庭での豊かな体験が不足しており、園で体験をさせていくことが必要と考えている。
- ・ 生活習慣が身につみにくい、自立の遅れなどが目立つ実態がある。
- ・ 家庭教育が一番大切だと思う。子どもたちに危ないこともさせたい。「危ないからさせない」ではなく、「危ないから見ておく」というように、親子で安全管理ができるようにしたい。
- ・ 資料の「背景」は、子どもの現状や中央教育審議会答申を踏まえているのがよく分かる。しかし、一方できれいに整理しすぎである。鳥取県の特徴が太字で書かれているようなものにするとういのはよいのではないか。お手本のようなプログラムよりも、ここを何とかしようというポイントが見えるようなものにしたい。
- ・ 女性就業率の高さ、子どもとかかわりが持ちにくい現状がある。一方では保育システムが変わっていることなどから、サービスや体制を広げるとレベルが高いように見えるが、子どもにとって何がよいのか、本当に子どものためになることを考えて、こういう子どもたちにしようということが見えるプログラムがよい。
- ・ 近年、保護者や家族からの要求というよりもクレームが多い。理詰めで言われると対応できない若い保育士が多い。保育士は追い詰められ逃げ場所がなく、自信を失い、孤立するという状態がある。そういう意味で親とともに育っていくというシステムが位置づけられるといい。
- ・ 幼稚園教員や保育士の研修をしても実践にまでつながりにくいということも現場の抱えている課題の一つ。めざす子ども像に向かって先生が違ってもどの子どもにも同じように経験させたいと考えて町独自の実践事例集を作成した。こういうことがプログラムの改訂に生きてくればよいと思う。

（2）プログラムの方向性について

- ・ 以前のプログラムに比べ、骨子には抽象的な言葉が多い。
- ・ 小学校教育の先取りをするためではなく、幼児期を充実させるために、小学校へつながるために、幼児期に期待すること、めざす子ども像を探っていきたい。

- ・ 0～2歳は親子の愛着関係を大切にしたい。しっかりと愛情を注ぐことを大事にしたい。
- ・ 鳥取の就業率の高さが現状としてある。その枠の中で考えていけないといけない。枠組みを何とかしないとけない。ワークライフバランス支援システムが必要。
- ・ 保育士からは、子どもを預かる時間ばかりが長くなっていくという声を聞く。園に子どもが長時間いることを見直さなくてはいけない。
- ・ ワークライフバランスの話がでたが、職場環境についてはどうなのか。このプログラムに盛り込めるのか。
- ・ 鳥取県のプログラムを世界的なものにするという意気込みでいくのか。それとも、国から言われて期限内に作成しなければいけないというものなのか。
- ・ 幼児教育の認知度をあげることは、切実な問題である。
- ・ ワークライフバランスを考えていくと、教育委員会の範疇をこえる。範疇から飛び出してつくった場合に焦点が絞れるか。はみ出していくと、実効性がなくなる。
- ・ 子どもは全部一緒である。所管という枠があるのはやむを得ない。湯梨浜は枠を取っ払い幼保一体の目指す子ども像を考えた。「湯梨浜を愛する子」にしたいという願いがある。タイトルが鳥取県らしさを出すものになるといい。みんなが「鳥取県の子ども」という思いで、教育をしていきたい。それぞれに育てたい力がある。幼保・小・中・高とつながる出発点として考える。
- ・ 育ちを保障するワークライフバランス、女性就業率から「家に入れるようにしなければ」と提言をしてもどれだけ実効性を持つのかということは難しいのではないか。限界が出てくる。
- ・ 柱の4つ目の「親育ち」をどう膨らませていくかで、方向を打ち出せる。鳥取県の幼児教育プログラムにする、このあたりの問題が、具体的な方策となるのではないか。
- ・ 保育士の仕事量が増える可能性がある。基本は大切だが、細かくしすぎることなく、園に任せてもよいのではないか。園からの発信だけでなく、他部署からの発信でもよいのではないか。「決めました」とがんじがらめではなくゆったりとしてはどうか。

(3) めざす子ども像について

- ・ 鳥取県のめざす子ども像「自立して心豊かに生きていく人」は0～5歳でイメージしたときしっかりこない。就学前の子ども像をぜひ表したい。
- ・ 「元気な体 豊かな心 遊びこむこども」はあいまいである。言葉の喚起力がないので、建前になってしまう。「遊びこむ 充実した心身」としたほうが人をひきつけるのではないか。研ぎ澄ました言葉にしたい。
- ・ 遊ぶことは心も体もひとつになること。勉強と遊び、仕事と遊びは、全く違うものという理解されているが、子どもにとっては遊びそのものが目的である。遊びの定義を考える必要がある。
- ・ 「遊びきるこども」はよいと思う。
- ・ 「遊びきる」一つではどうなのか。0歳児は「愛着」を大切にしたい。
- ・ 鳥取の子ども像として「遊びきる」一つではさびしいが、捨てがたい。子どもは、遊びの中で育っていく。インパクトがあり、親もはっとする言葉である。
- ・ 子どもと一緒に遊ぶことで大人も成長できる。
- ・ 子どもは遊ぶことが仕事。子どもの遊びと大人の遊びは質が違う。60万人県民に理解してもらえるような方法を考えていきたい。